様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年４月１０日現在

機関番号：３２６２３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００７　～　２０１０
課題番号：１９５３０５９８
研究課題名（和文）幼児の園生活理解の発達過程：家庭での様子からの検討

研究課題名（英文） The development of children's knowledge of preschool life: A research by examining their behavior at home

研究代表者
藤崎　春代（FUJISAKI HARUYO）
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号：００１９９３０８

研究成果の概要（和文）：幼児の園生活理解の発達過程をとらえるために、幼稚園の３歳児クラス入園直前から卒園までの３年余りの間に、保護者を対象として８回の質問紙調査と２回の日誌調査を実施した。結果、子どもが家庭でみせる様子は、時期により異なること、個人差があることがわかった。また、保護者は子どもの様子の意味を推測してさまざまな対応をすると同時に、心配したり安心したりと感情が揺れ動いており、子どもが家庭に持ち込む園生活に保護者自身が巻き込まれていることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：Parents answered questionnaires 8-times and wrote diaries 2-times about their children's attitudes, for 3 years, from the start of their 3-year-old children's kindergarten life to the end. Results indicated that children's attitudes changed for 3 years and differed. Parents responded to their children's attitudes, by guessing the meanings of the children's attitudes. As a result, they felt either easy or uneasy. It was suggested that parents were involved in kindergarten life through their children's attitudes.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	600,000	180,000	780,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：生涯発達・園生活理解・幼児・保護者

１．研究開始当初の背景

現在、多くの幼児が、一日の中のもっとも活動的な時間帯を幼稚園や保育園で過ごしている。しかしながら、園で生活するということはそう簡単なことではなく、泣きながら登園したり、さらには登園を拒否したりすることは、決して珍しいことではない。保護者は、こうした子どもの様子に戸惑い、それが育児不安を助長する。従来、心理学領域では、こうした園へのなじめなさに対して、母子分離不安から生じると考えることが中心であった。母親という強力な安全基地から離れることへの不安が、泣きながらの登園や登園拒否を引き起こすという仮説である。それに対して、

本研究では、入園を＜生涯発達の中で幾度となく繰り返される人生移行の最初の経験＞（山本･ワップナー　1992）と位置づけ、「幼児が家庭生活とは異なる園生活の活動の成り立ちを理解する」必要に迫られるライフイベントであると考えて検討する。子どもは、未知の場でどのように生活活動に取り組めばよいのかと不安を抱えながらも、泣きながらも、その一方で、園生活を自分なりに理解しようとし、また、保育者や保護者はそれを援助するのであろうと考える。こうした位置づけは、本研究に独自なものではないが、こうした立場に立つ先行研究は、事例研究により、移行の際の戸惑いや慣れていく様子を記述することが中心であった。それに対して、本研究では、生活理解にかかわる認知心理学研究の研究成果や研究方法を取り入れ、移行を支える認知的側面の発達のプロセスを検討しようとすることが特徴である。

無藤(1994)は、子どもの生活活動をとらえる次元として、(1)時間的側面(活動は時間の流れの中で展開する)、(2)空間的側面(空間的な環境をどのように子どもは分け、またそこに関わっているのか)、(3)活動内容の側面(活動内容と、その活動に対して子どもやまわりの大人がどのように参加するのか)の３つを指摘している。

このうち、(1)の時間的側面については、認知心理学において、スキーマ理論の一部であるスクリプトあるいは一般的出来事表象の概念を用いて検討が重ねられてきており、スクリプトあるいは一般的出来事表象が記憶の組織化、遊び、円滑なコミュニケーション、性役割などの発達の基礎になることが検討されてきている。こうしたスクリプトあるいは一般的出来事表象は、非言語的に行為として再生するという点に注目すれば、乳児においてもその存在が指摘されているが、一方で、言語的に表象し、柔軟にスクリプトや一般的出来事表象をコントロールしていくことは、幼児においても長い時間をかけて行われることを、研究代表者である藤崎(2002)は明らかにした。(2)の空間的側面についても、藤崎(1994)は、保育園のクラス室、園庭、ホール、絵本コーナー、トイレ、園外の公園など、それぞれの場の特徴により、子ども同士・子どもと保育者との間の相互作用の特徴が異なることを明らかにしている。さらに(3)の誰が何にどのように取り組むかという活動内容の側面について、園ルールという視点から検討した藤崎(1988,1989)では、園ルールの理解においても、幼児期の長い時間をかけて理解が進むことを示した。

こうした研究成果により、幼児の園生活理解は一定程度明らかにされてきたが、上記の研究成果は、園で子どもに個別面接調査を行ったり、保育場面の観察を行ったりすることを通して得られたものである。つまり、園でみられる子どもの姿からの検討であった。それに対して、子どもの園生活理解の発達過程を家庭での様子から検討しようとするのが、本研究である。先行研究の成果と本研究の成果とを統合することにより、子どもたちが園生活を理解していくプロセスの全体像をとらえることができると考える。

２．研究の目的

幼稚園に３歳児クラスから入園する子どもとその保護者を対象として、家庭で保護者に把握される子どもの様子、家庭での子どもの様子にもとづく保護者の心配とその解消へのとりくみについての質問紙調査と日誌調査とを、卒園までの３年間にわたって縦断的に行う。また、平行して、補助資料として、園での子どもの生活の様子の観察を実施する。これらの資料を基に、明らかにしたいことは以下の３点である。

(1)園生活に適応していく様子や不適応に陥りやすい時期や契機を明らかにする。園生活に戸惑うのは、３歳児クラス入園直後のみではなく、４歳児クラス・５歳児クラス進級時にも、同様の戸惑いが見られるであろう。また、こうしたクラス移行時のみではなく、大きな行事などに取り組む際にも、何らかの戸惑いが生じる可能性がある。こうした戸惑いを生じる時期と契機とを、園での観察と保護者からの家庭での様子の報告から、３年間にわたって縦断的にとらえていく。

(2)(1)でとらえた適応していく時期や戸惑いの時期に、子どもが家庭ではどのような様子を見せるのか、家庭では園生活について何をどのように語るのかについて整理して、園生活理解のプロセスについての示唆を得る。特に、藤崎(2002)では、3歳クラス児が言語的には園独自の生活の流れについて報告できない一方で、入園２・３ヶ月でほぼスムーズに生活できていることを、園での観察や保育者への面接調査でとらえている。この両者の間のずれをどのように考えればよいかの知見も得たい。

(3)幼児の園生活理解を促し、支えるために保護者がどのような取り組みを行っているのかを整理する。幼児の園生活理解を促し、支えるための保護者の有効な取り組みを整理するとともに、保護者が有効な取り組みを行うためには保育者がどのように支援すればよいのか、あるいは外部の心理の専門家がどのよう

に支援しうるのかを検討する。
従来の入園をめぐる研究は、せいぜい入園後２・３ヶ月を対象としたものである。それに対して、３歳児クラスから４歳児クラスへの進級、４歳児クラスから５歳児クラスへの進級、さらには就学前準備をも検討対象とする点が独自なものである。進級に伴い慣れ親しんだ保育者や友達と離れることは再び不安を引き起こす可能性がある。また、進級とともに、子どもにとっての園生活の意味も変わってくると考えられる。学校への移行も視野に入れつつ、入園から卒園までにわたる幼児自身の園生活理解への取り組み、周囲の大人が行う援助の様子を、縦断的に検討する。縦断的資料からは、園生活理解における個人差も検討できるであろう。

３．研究の方法

研究は、８回の質問紙調査と２回の日誌調査からなる。

質問紙の内容は、実施時期にかかわらず共通するものもあれば、時期により異なるものもある。共通する項目は、生活習慣や生活リズムに関する項目、「園で習った歌を歌う」などの園生活の様子がうかがえる行動についての項目、各時期で心配なこととその解決へ向けての取組み項目、などである。時期により異なる項目としては、１回目調査（入園直前）における入園前保育経験の有無・入園前の遊びの状況・該当園選択理由・３歳からの入園理由、２回目調査（入園直後）における入園までの家庭での取り組み、４回目・６回目調査における行事への子どもの取組みと保護者の感想、５・７回目調査における進級にあたっての子どもの様子と保護者の心配や取組み、８回目調査における園生活のふりかえりと入学へ向けての準備、などである。

日誌記録調査は、入園式翌日からの１週間と、４月下旬から５月初めの１週間、生活時間の流れに沿って、園生活にかかわる子どもの様子と保護者の対応と保護者の感想の記入を求めた。

４．研究成果

目的と対応して、以下のような結果が得られた。

(1)幼稚園３歳児クラス入園直後の１週間に、親が家庭でとらえた園生活にかかわる子どもの様子の日誌記録からは、子どものタイプとして、登園時も降園時もにこにことしている〈にこにこ〉、登園時は大泣きするものの降園時はにこにことしている〈涙とにこにこ〉、大泣きしないもののにこにこ顔も見られず親が不安を読み取っている〈不安そう〉の３つが見出された。全体の３分の２が〈にこにこ〉タイプであるが、3 分の１は朝大泣きしたり、不安そうな様子であったりすることが分かった。ただし、「どうしてお母さんは(園に)行かないの？」などの発話が＜不安そう＞タイプの一部にみられたのみであるという結果からは、大泣きしたり不安そうな様子を示したりする子どもがみな分離不安を示しているわけではないことが示唆された。兄姉がいる子どもには＜不安そう＞タイプがいなかったことや、＜不安そう＞タイプであっても就園前保育に通っていた子どもは園生活についての質問をしていることからは、事前知識や事前経験のあることが子どもの園生活開始のスムーズさと関連していることが示唆された。ただし、兄姉がおらず、就園前保育経験もない子どもの３分の２が＜にこにこ＞タイプであり、兄姉がおらず就園前保育経験がなくとも園生活をスムーズに開始できている子どもがいるという結果は、保護者のあげる入園理由「3 歳が適切な入園年齢と考えた」に対応するとも考えられ、入園前の近所の子どもとの関わり経験など、子どもの側の何らかの準備状態も関連していると思われた。

入園後１ヶ月後の日誌記録および３ヶ月後の質問紙調査結果の分析結果からは、入園直後１週間の日誌調査で＜にこにこ＞タイプの者は、日によって泣いたり、疲れた様子が顕著であったりして保護者を心配させることもあるものの、全員３ヶ月後も「ほとんど毎日」楽しく登園していた。一方、「時々楽しい」という回答は、＜不安＞タイプか＜涙とにこにこ＞タイプの子どもであり、これらの２タイプの中には入園後１カ月の時点でも、登園時に泣いたり不安な様子を見せたりする者もいた。ただし、3 ヶ月後調査では、「ほとんど毎日」楽しみに登園していた。入園後３カ月たつころには、ほとんどの子どもが登園を毎日、あるいは時々楽しみにするようになることが確認できた一方で、園生活適応過程には、個人差のあることがわかった。

4 歳児クラスに進級する前後の様子の分析からは、「(年中になるのを)楽しみだと言っているが、中身を聞くと答えがない」という回答に代表されるように、イメージのないまま進級を迎えるが、進級時に戸惑いが見られたのは３割程度の子どもであった。「友達の作り方が分からない（該当園は２クラス制で進級時にクラス替えがある)」と不安を訴えたり、爪かみや落ち着きのなさがみられたりした。しかし、進級後３ヶ月もすると、年下への気遣いをするなどの成長がみられていた。5 歳児クラスへの進級時にも戸惑いの様子が見られた子どもは３割程度おり、友達関係の戸惑いがその中心であった。一度進級の経験があるとはいえ、クラスが変わることは大きなストレスのようである。

一方、運動会やお遊戯会などの行事につい

ては、ほとんどの子どもが楽しみにしていた。特に、兄姉のいる子どもは、兄姉の行事への参加経験から3歳児の時点でも楽しみにできるようであった。3 歳児クラス時には、保護者の方を向いて演技していたのが、4 歳児クラスになると仲間と合わせようとするようになり、5 歳児クラスになると上手にできるようにと家で練習する子どももいた。

(2) 8回実施した質問紙調査の3回目(3歳児クラス7月)、4回目(3歳児クラス2月)、5回目(4歳児クラス7月)、6回目(4歳児クラス2月)、7回目(5歳児クラス7月)の調査項目のうち、家庭で見られる園生活に関連した様子を分析した結果からは、3歳7月には、多くの子どもが登園を楽しみにし、園で習った歌を歌ったり、友だちや先生そして出来事の話をしたりしていることがわかった。ただし、歌を歌うことや先生の話をすることは 4歳児クラス以降減少した。お弁当を楽しみにすることや幼稚園ごっこをすることも、3 歳児クラスに比べて4･5歳児クラスで減少したが、これらは、前述の項目に比べると個人差が大きかった。一方、園でのルールの話をすることは3歳児クラスにおけるよりも4歳児クラス後半以降に増えており、園で作った製作物を家でも作ることも入園当初より4歳児クラス後半が多かった。子どもが家庭で見せる様子は時期により異なること、また、個人差が大きい項目があることが示唆された。

こうした結果からは、ことばで園生活について語ることは4歳児クラスをまたなければならないが、遊びや歌などで再現することは入園当初から見られることが分かり、3 歳児クラスにおいても園生活理解が進んでいることが示唆された。

(3)保護者は、子どもの園生活に対して、さまざまな取り組みをしていることが分かった。まず、「近くに同年齢の子どもがいない」などの子どもを取り巻く状況から3歳での入園を考え始め、園の特徴を見学などで確認してから入園させている。入園にあたっては、生活習慣の獲得への配慮をするほか、日々、園生活に適合するような生活リズムを作ろうと努力していた。しかし、家族の他メンバーの生活リズムとの折り合いをつけることが難しい場合もあり、保護者（特に母親）を悩ましていた。

さらに、子どもの様子の意味を推測してことばをかけたり、対応したりしているのみではなく、不安を感じたり安心したりなど保護者自身の感情が揺れ動いていることが示唆された。子どもが園生活を送ると同時に、保護者も、子どもの様子を通して園生活に巻き込まれていくことが分かった。

進級は、子どもが戸惑うこともあり、心配な時期でもあるが、わが子が年下の子どもを気遣ったり、自分でできることを自分でしようとしたりする姿に接して、成長を実感する時期でもあった。また、行事の際に見せる子どもの様子の違いも、わが子の成長を感じる機会であることが分かった。

なお、子どもの戸惑いに対しては、まずは、自分自身や家族で対応しているが、保育者や先輩ママに相談したりすることも多かった。一方で本を読んだり、専門家に相談したりすることは少なかった。保護者自身により、保育者や先輩ママへの相談は有効であると認識されていた。保育者が子育て支援の担い手として重要であることが確認されるとともに、先輩ママへの相談の有効性からは、子どものみならず保護者にも仲間が必要なことを示唆するものと思われた。

文献

藤崎春代　1988　幼児の社会的ルールの理解　日本教育心理学会第 30 回大会発表論文集 pp.296-297

藤崎春代　1989　幼児の社会的ルールの理解(2)　日本教育心理学会第31回大会発表論文集　p.112

藤崎春代　1994　障害児統合保育を通してみた園環境の構造　保育学研究、32、76-85

藤崎春代　2002　幼児の日常生活叙述の発達過程　風間書房

無藤　隆　1994　幼児教育と学校教育：幼児から小学生へ.講座 幼児の生活と教育１ 幼児教育とは　pp.77-108　岩波書店

山本多喜司･ワップナー，Ｓ.(編著)1992　人生移行の発達心理学　北大路書房

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①藤崎春代　幼稚園入園当初の3歳児の様子と親の反応との関連－親が記述した日誌からの検討－、昭和女子大学生活心理研究所紀要、査読有、Vol.13、2011、1-12

②藤崎春代　子どもの園生活と保護者の発達、発達、査読無、Vol.118、2009、58-64

〔学会発表〕（計４件）

①藤崎春代　家庭で見られる園生活に関する子どもの様子－3歳児クラスから5歳児クラスまでの縦断的調査からの検討－、日本発達心理学会第22回大会、2011年3月26日、神戸国際会議場

②藤崎春代　幼稚園3歳児クラス入園児の園生活への適応過程と保護者の援助―生活時間の調整に注目して、日本発達心理学会第 21回大会、2010年3月27日、神戸国際会議場

③藤崎春代　幼稚園3歳クラス新入園児の園生活への移行過程(2)－入園後 3 ヶ月間の家庭での様子からの検討、日本発達心理学会第

20 回大会、2009 年 3 月 24 日、日本女子大学
④藤崎春代　幼稚園 3 歳クラス新入園児の園生活への移行過程―保護者の保育記録の分析から、日本発達心理学会第 19 回大会、2008 年 3 月 19 日、大阪国際会議場

〔図書〕（計２件）
①藤崎春代・木原久美子　ミネルヴァ書房、「気になる」子どもの保育、2010、189(98～186)
②藤崎春代　ミネルヴァ書房、友達とのかかわりあいを通して育つものは何か、2008、140-141、内田伸子(編)、よくわかる乳幼児心理学

６．研究組織
(1)研究代表者
藤崎　春代（FUJISAKI HARUYO）
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号：００１９９３０８

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし